砂と水と月の国で

橘　塔子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂と水と月の国で

【Ｎコード】
Ｎ５６６７Ｚ

【作者名】
橘　塔子

【あらすじ】
何時とも知れぬ時代、何処とも知れぬ世界、広大な砂漠は月の神に守護された王国によって統一されつつあった。繁栄を極めるその王都に、異国から美しい旅の楽師がやって来る。過去に因縁に持ちながらも名君と謳われる国王は、その楽師を雇い入れた。オアシスの国を舞台に、好奇心旺盛な末の王女と、真面目な属国の王子との成長を描く。
ファンタジーですが、超自然的なことはあまり起こりません…。

邂逅

砂漠の民に伝わる神話の中で最もよく知られているものといえば、オドナス王国起源に関するアルハ神の伝説だろう。アルハは月を司る神である。

遥か昔、広大なこの砂漠を渡る途中で方角を見失い、飢え乾いて砂に倒れた旅人がいたという。旅人はアルハ神への信仰がたいへん厚い人間であったので、ちょうど東の空から昇ってきたこの神はそれに気づき、瀕死の彼を憐れんだ。アルハの涙は天空に懸かる満月から滴り落ちて、その地に澄んだ湖を造った。それで旅人は命を取り留めた。

水で喉を潤した後、湖畔で感謝の祈りを捧げる旅人にアルハは告げた。

おまえの信仰心に報いるためにおまえの命を助け、この湖を与えよう。おまえが我を信仰する限り、我はおまえとおまえの血族を加護するだろう。子々孫々の代までこの地に留まり、この湖を守るがいい。

だが、おまえとおまえの血族が我の心に背き非道な行いをした時は。

その時は、この湖を黒く濁らせ波を炎に変え、再び砂の中に消すだろう――。

旅人はその地に留まり、水を求めて集まってきた人々をまとめて国を興した。

これがオドナス王国建国にまつわる伝説である。

「ひどうなおこないってどういうこと？」

父親の語る伝説を聞いて、少年は素直に疑問をぶつけた、

訊かれた父親は傍らの幼い息子に目をやって、優しく微笑んだ。

「裏切ったり嘘をついたり家族を傷つけたり、この国の人を不幸に

することだよ」
彼もまた息子と同じ年頃に父親へ同じ問いかけをし、やはり同じ答えをもらったことがあった。
「ふうん…」
少年は繋いだ父親の手を握り締めて、好奇心に満ちた黒い瞳を宙へ向けた。
石造りの高い天井に開いた大きな天窓から、ちょうど中天に懸かった丸い月が見える。月は濃い蜂蜜のような色をしているのに、そこから降り注ぐ光は冷たい銀色だった。
少年と父親の目の前、天窓の真下に当たる位置には白い立像があった。
月光を一身に浴びて佇むその像は、人間の等身大よりもやや大きい。身長と同じ高さの台座に乗っているため、下から眺める者はそれを仰ぎ見る姿勢になる。少年と父親もそうしていた。
月神アルハの像である。
緩やかに波打つ頭髪も痩躯に纏いつく長い衣装も、水を掬うような形で胸の前に掲げられた両手も、白い石で作られているとは信じられないほど精巧だ。月明かりが石に刻まれた陰影をくっきりと浮かび上がらせ、今にも息をしそうに見える。ひとつの国を造り、いずれ裁きを下すとされる神は、しかし優しげな表情で彼らを見下ろしていた。
何て綺麗なんだろう、と少年は素直に思った。お月様が人の形を取ったら本当にこんな姿になるんだろうか…。
「ちちうえ」
少年は頬を紅潮させて父親を呼んだ。
「いつかアルハ様に会えるかな？」
息子の声に幼いながらもひたむきさを感じて、父親はその場にしゃがんで目線を合わせた。
「アルハ様はいつでも月のお姿をして空にいらっしゃるよ。我々を見守って下さるのだ。もちろんおまえのこともね」

それから息子の肩に手をやって、立像に向き直った。
「もしアルハ様がこのお姿で現れたら、その時は――この国が滅ぶ時だ」
この湖を黒く濁らせ波を炎に変え――。
その光景を思い浮かべようとしたが、少年にはうまくいかなかった。物心ついた時から見慣れている青い湖が黒く濁って砂に沈んでゆくところなど想像できるはずもない。
父上にはそれができるのだろうか。だからいつも心を配って、皆が幸せになれるように自らの務めを果たしているのだろうか。
少年は再びアルハ神の立像を見上げた。
会うのは怖い。でも、本当に神様がいらっしゃるなら、会ってみたい。そう思った。

砂丘の連なりは金色の海原だった。
どこまでもどこまでも、視界の続く限り、世界の続く限り、日を浴びた金色のうねりが覆いつくしている。そしてびょうびょうと吹き付ける強い風が、その波頭の形を刻々と変えつつあった。遥か高み、鳥の目で見れば、ひとときも止まらぬその変化が見て取れたかもしれない。だが一片の雲もない明るい空を行く鳥はなかった。
明るい光に満ちた、不毛の砂漠――。
その海原を、ひとつの影法師が進んでいた。
砂丘から砂丘へ風とともに渡る細かい砂の粒を全身に浴びながら、ゆっくりと歩を進める者がいた。空の青と砂の金色しかない世界で、その姿だけが際立って異質に見えた。
全身をすっぽり覆うような木綿の長い上着は、砂漠の民の一般的な旅装束だ。吹き付ける砂から呼吸器官を守るために同じ木綿の布で頭部と顔を覆っているため、男か女かすらも定かではなかった。
背負った袋はたいして大きくもないが、その袋の上に何やら丁寧に布で巻かれた丸い包みが括りつけられている。それと、腰に携えた一振りの短剣――旅人の荷物はそれだけであった。果てがないよ

うに思えるこの砂漠で、旅人の存在はそれだけ――。
旅人の残した足跡を、瞬きをする間に風が掻き消してゆく。過去も未来も持たないような影法師でありながら、しかし旅人はひるむことなくしっかりとした足取りで焼けた砂の上を歩んでいる。
熱い風をよけてやや俯き加減になっていた旅人の顔が、ふと、上がった。
歩みが止まる。
旅人が今越えてきた背後の砂丘から、凄まじい量の砂が滑り落ちてきた。
「そこの！　止まれ！」
この地方の方言での怒号は、野太い声だった。同時に、人間のものではない足音。それも一つや二つではない。
旅人はゆっくりと振り返った。
砂丘の上から駱駝の群れが駆け下りてきていた。２０頭はいるだろうか。騎手はいずれも旅人と同じような格好をした男たち。ただ違うのは、全員が長い蛮刀や手斧を背負っていることだった。
彼らは瞬く間に旅人を取り囲んだ。金色の埃が波のように舞い上がった。
旅人は動かない――動けないのかもしれない。
やがて一頭の駱駝が前に進み出た。
乗っているのは大柄な体つきの男だった。まだ若いようだが、日に焼けた浅黒い顔は硬い髯に覆われている。髯と同じこげ茶色の目は、狡賢い獣のような光を帯びていた。
統制された駱駝の手綱さばき、護身用にしては大仰すぎる武器――砂漠に数多く存在する盗賊の一集団らしい。オアシス都市間を行き来する隊商を襲っては生計を立てている連中だ。
「こんなところを１人で歩いているとはな。隊商とはぐれたのかい？」
髯の男――盗賊団の頭目は旅人の全身を値踏みするように見下ろした。

旅人は答えない。顔のほとんどは布に覆われて表情が伺えないが、わずかに覗く両眼は明るい灰色をしていた。銀色――と言ってもいいかもしれない。

その瞳の色に気づいたのか、頭目は、

「異国人だな。これはいいもんをを見つけた」

と、笑った。

「異国人は高値がつくんだよ。おまえが商人か逃亡奴隷か知らねえが、こんな砂漠のど真ん中を一人で彷徨ってるんだ。干からびて死ぬより売られた方がマシだろ。来な」

頭目は腰につけた片刃の蛮刀を引き抜いて、駱駝から降りた。刃は分厚く、力でぶった切る粗暴な刀だ。持つ者のいかつい体型と相まって、その武器を振るう前にほとんどの相手をひるませてしまうだろう。

立ち尽くす旅人もそんな相手の一人と見て、頭目は警戒のない素振りで近付いて来た。もちろん他の仲間が標的が逃亡しないよう注意深く取り囲んでいる。

「ツラを見せな」

蛮刀が上がり、肩の高さで止まった。その先に旅人の顎があった。

顔を覆った布に、切っ先が触れる。

「傷物にはしたくねえ。大人しく…」

「…道を開けてくれないか」

一瞬、頭目の動きが止まった。発せられたその声が眼前の旅人の喉から出たと理解するまで少しかかったからだ。

武器を向けられている人間のものとは思えないほど落ち着いた、若い男の声だった。風の音にも消されず低く通る。

何だ男か、と落胆するより先に、頭目の神経をふと冷たいものが撫でた。戦いと略奪を繰り返してきた盗賊の太い神経を、だ。理由は分からない。

同じ感情を覚えたのか、取り囲む仲間がそれぞれに武器を抜いた。不穏な空気が流れる。

それを掻き消すように、頭目は声を上げて笑った。
「いい度胸だ！　それともただの馬鹿か？　いいからツラ見せろ！」
蛮刀の切っ先が横なぎに動いた。もし旅人が怯えて身をかわしたりしていたら、その顔か喉元に切り傷がついていたかもしれない。
だが旅人は微動だにしなかったので、布だけが裂けて風に流れた。
あらわになった旅人の顔を見て――頭目の笑いが凍りついた。大きく両眼が見開かれる。
同時に、仲間たちも動きを止めた。
こいつ…こいつは…。
「…こりゃあ驚いた…お、おまえにはどんな高値がつくか…」
頭目は蛮刀を引いて手を伸ばした。旅人の漆黒の髪が揺れている。
誰が命じた訳でもないのに、仲間たちも次々に駱駝から降りた。本能で火に引き寄せられる羽虫のごとく、円の中央に立ち尽くす旅人へ向かう。乾ききった砂漠の空気が、にわかに妖しい湿度を帯びたようだった。
旅人は動かない。腰の短剣に手を伸ばすこともない。
ただ――銀色の両眼がわずかに細まった。
頭目のごつい手が、旅人の肩に触れようとしたその時――新たな足音と砂塵が沸き上った。
盗賊たちが現れたのとは逆方向、これから旅人が向かう砂丘の頂上で。
背を向けていた頭目は弾かれたように振り返った。
「その人から離れろ！　犬どもめ！」
風を切り裂いて吹き降ろした声は、まだ声変わり前の少年のものだった。
数にして盗賊たちの倍、数十騎の駱駝が砂丘に並んでいる。金色の砂と青い空の境界に立つその背に乗った者たちは、皆鮮やかな緋色の装束に身を包んでいた。騎乗でも扱いやすい中程度の長さの剣を携えている。
彼らの中央に、先ほどの声の主らしい、すらりとした小柄な騎手

がいた。
「くそっ…」
頭目は低く唸って、自らの駱駝に戻ろうとし、その前に旅人の腕を掴んだ。
いや、掴もうとした。拳は空を握っていた。そこにいたはずの旅人は、身じろぎひとつしていないように思えたのに、いつの間にか身長分ほどの距離を取っていたのである。
その距離を追うには事態は余りにも切羽詰っていた。頭目は舌打ちをしたが、次の瞬間緋色の騎手たちから矢が放たれて、慌てて駱駝に走り戻った。
騎手たちが剣を振り上げて砂丘から駆け下りてくる。
数の上で圧倒的に不利と見て、盗賊たちは潔く逃げに回った。慣れた手綱さばきで砂丘を駆け上がる。
「逃がすな！　今日こそ一匹残らず討ち取ってやる！」
少年の叱咤で、緋色の騎手たちは激しく追撃した。駱駝の足音と剣を打ち合わせる金属音と、男たちの怒号が砂を蹴散らした。
「小僧！　この借りは返すぞ！」
頭目は右手の蛮刀で敵を薙ぎ払いながらそう叫んで、それでも未練を込めた眼差しを旅人に送って、仲間たちとともに砂を撒いて走り去った。
緋色の騎手たちは3分の2ほどが追撃に回り、残りの十数騎がその場に残った。
実に統制の取れた動きだった。盗賊とはまったく違う、訓練された兵士の動き。
そしてこの４０名もの大人を指揮したのは――。
「旅の人、怪我はないか？」
遠ざかってゆく盗賊たちと自らの兵団を視界の隅に置きながら、少年は旅人に声をかけた。
大人びた口調だが、見たところ歳の頃はまだ１１、２歳。赤銅色の肌と夜空色の瞳。砂漠の厳しい環境を生きる者らしく精悍で端正

な顔立ちは、まだあどけなさを強く残している。他の大人たちと同じ鮮やかな緋色の装束だが、少年が頭に巻いた同色の布には金色の刺繍が施されていた。
「今のはこの辺りを縄張りにする盗賊の一団だ。殺す盗む犯すのたちの悪い連中だ」
盗賊たちとはまた別の特徴を持つ発音でそう言いながら、少年は剣を鞘にしまって、駱駝の首を軽く叩いた。大人しく跪いた駱駝から軽やかに降りてくる。
「無事でよかった。言葉は分かるか？…」
問いかけて、少年の唇が動きを止めた。初めて、旅人の顔を正面から見たのだ。
「…助けてくれてありがとう。礼を言う」
旅人は微笑んだ。静謐に――今までの喧騒などなかったかのように。
その顔は実に美しい作りをしていた。
２０代半ばの青年である。灼熱の日差しを浴びながらその肌は象牙のように白い。すらりと通った鼻筋、ごく薄い朱色を帯びた唇、そして長い睫毛に縁取られた二つの目は銀細工の色をしている。
砂漠の夜を冷たく照らす月が、怜悧な銀色の三日月が人の形を取ったようだ、と少年は思った。彼が思いつくいちばん美しいものがそれだったからだ。
「…異国の人だな。ま、まさか一人でこの砂漠を？」
少年は冷静を装いながら言った。同性を美しいと思うことがとても罪深く感じられたからだ。しかし目は逸らせない。
旅人は肯いた。
「北の方へ行くつもりだ」
「歩いてか！？　そんな無茶な…」
少年は言葉を切った。この男にとっては無茶ではないのかもしれない、現にこの砂漠の真ん中をこうして歩いているではないか。隊商はおろか駱駝の一頭も連れず。

少年は少し考えて、旅人をぼうっと眺めている部下の一人に何やら指示を出した。心ここにあらずといった風情を咎める気にはならなかった。
「なら、せめてこれを」
少年は部下から受け取った袋を旅人に差し出した。羊革製の、水の入った水筒である。
旅人は目礼し、それを手に取った。
「お心遣い感謝する」
「北へ行くのならオドナスの領土を通ることになる。あの大王国は交易が盛んで異国人に寛大だ。安心して行くといい」
それは、ここ１０年ほどで急速に領土を広げてきた国の名だった。点在するオアシス都市国家を次々と併合している。砂漠の北の果てにそそり立つ急峻な山脈から、南は海岸線まで、この乾いた大地の全域を掌握しつつあった。
少年の言葉にわずかな口惜しさの響きを感じ取って、旅人は優美な眉根を寄せた。
「あなた方はオドナスの兵ではないのだね」
「違う」
少年は即答した。
「我々はロタセイの民」
砂漠の東部、ごく低い草が生い茂る土地で暮らす遊牧民である。家畜を飼う他、砂漠を行く隊商と交易をしたり、また彼らの警護を引き受けることもある。今回の盗賊狩りもその一環であったのだろう。
その衣装の鮮やかさと誇り高い民族性から『緋色の勇兵』とも呼ばれていた。
「俺はロタセイ王の息子だ。オドナスがどれだけ縄張りを広げようとも、我々の手の届く範囲は我々で守る。これまでも、これからもだ」
「ご立派なお志だ、若きロタセイの戦士よ」

旅人の賛辞には微塵の厭味も下心も、また子供に向けた適当なあしらいも感じられず、少年は焼けた頬に笑みを浮かべた。
このわずかなやり取りの間に、彼は旅人に好感を持った。だが――砂漠を行くものは一瞬たりとも立ち止まらない。深い絆など求めてはいけないのだと、この歳でもよく分かっていた。
「では…道中お気をつけて。あなたの旅がよい水とよい風に恵まれますように」
砂漠での別れの挨拶だった。旅人は黙って頭を下げた。
――砂塵を蹴散らして遠ざかってゆくロタセイの騎手たちを見送って、旅人は足元に落ちた布を拾い上げた。
砂を払って、風に乱れた髪をまとめるように頭部に巻きつける。
「…あなたの瞳が輝きを失わぬよう」
呟きは祈りに似ていた。
再び歩き出した先の空は、もう夕暮れの赤い色に染まっていた。
もうあとわずかで、砂が血の色に染まる時間だ。

遯逅（後書き）

初めてファンタジーを書きます。
あまり重くならないように気をつけますが、少し暗めになるかもしれません。
ご感想頂けると嬉しいです。

将軍と歌姫

3年後――。

オドナスの将軍シャルナグは、広場で見慣れぬ楽器を演奏している辻音楽師が気になっていた。

粗末な服に身を包んだその楽師が手にしているのは、無花果を縦に割ったような形の弦楽器だった。それを膝から肩へ凭せかけて、短い弓で4本の弦をなぞっている。優美に伸びた無花果の先端で、左手の長い指が複雑に弦を押さえていた。人の声に近い音域の、ふくよかで艶のある、しかしどこか寂寥とした音色の楽器だった。

奏でている曲も異国の音楽のようだ。交易が盛んで多彩な文物に溢れたこの都の人々が、最初は物珍しげに足を止め、やがてうっとりと聴き入っている。

数日前に通りかかった際に耳に飛び込んできた音楽は、将軍の心にも不思議なくらい響いた。いつも店を出している露天商に訊けば、3日ほど前からここで演奏しているのだという。それからもう6日、将軍は毎日その演奏を聴きに足を運んでいた。

広場の中央では国内外の商人たちが市場を形成している。賑やかな物売りの声、甘くむせ返るような果物の匂い、家畜の鳴き声、銀製品のきらめき――それらすべてを明るい青空と生い茂る熱帯の植物が包んでいる。この砂漠最大のオアシスの恵みで、この都では水と緑には事欠かない。

そこかしこで大道芸人や辻音楽師が客を集めていたが、この不思議な弦楽器の楽師には敵わなかった。広場の片隅の石段に腰を下ろした楽師の前には、いつしか数十人の人だかりができていた。

楽師はひとしきり甘く切なげな旋律を奏でると、最後の余韻を長く響かせて弓を止めた。

客の唇から一斉にため息が漏れ、次の瞬間大きな拍手が湧き起こった。

「何ていう楽器だい、そりゃ？」
「異国の曲かね。もっと弾いてくれよ」
楽師の足元に広げてある袋に硬貨を投げ入れながら、客たちは口々に言った。
「では今度は、北の国の曲を」
楽師はそう言って笑ったように見えた。フードを目深に被り、鼻から下を薄い布で覆っているので実際の表情はよく分からない。
再び、弓が弦の上を滑った――。
楽師が歌うことはない。それなのに、聴く者の脳裏には北国の冷たい雪と風が、荒涼とした凍土が、火を囲んで集う人々の踊りが、短い夏の柔らかな陽光が、鮮やかに浮かぶのだった。
シャルナグは少し離れた場所で目を閉じてそれを聴いている。今年４０歳になった彼は、まさに大国の王軍を預かるに相応しい堂々とした体躯をしており、顔立ちもいかつく頬は髯に覆われている。そんな黒獅子のような容貌の彼が眉間に皺を寄せて目を瞑っているものだから、通行人が避けて通った。
「またそんな恐ろしいお顔をして、シャルナグ様、皆が怖がりますわ」
傍らに佇んでいた女があきれたような口調で言った。刺繍入りの麻の衣装を身に纏った若い女だ。オドナスの民よりももっと色素の濃い肌をしており、縮れた長い髪を頭頂で丸く結い上げていた。
シャルナグはうむと唸って目を開けて、
「どう思われる、キルケ殿？　あの楽師の演奏」
「シャルナグ様のおっしゃる通り、とても素晴らしいですわね。少し怖いくらい。弾いているのは本当に人間かしら？」
キルケと呼ばれた女は演奏に合わせて軽く鼻歌を歌う。やや低音の声が心地よく響いた。
「あの楽師は魔物か何かだと？」
「冗談ですわよ」
「うむ、冗談か。では陛下の御前で演奏させるに値するだろうか？」

キルケは首肯した。
「将軍閣下の耳は確かです」
「ありがとう。今日はあなたに来てもらってよかった」
強面の将軍の笑顔は、意外なほど人懐こかった。
楽師の演奏が終わると惜しみない賛辞と銀貨が振り注いだ。彼はいつもほんの数曲披露するだけで立ち去ってしまう。今日もまた、あまり愛想を振りまくこともなく、初日の１０倍ほども溜まった銀貨をしまいつつ立ち上がった。もっと聴きたげな聴衆に会釈をして楽器を脇に抱えた。弓も本体に差し込める作りになっているようだ。
シャルナグは意を決して彼の後を追った。
「楽師殿！」
広場から大通りに繋がる出口の所で呼び止めると、楽師はゆっくりと振り返った。
フードの下で銀色の眼差しが薄く光っている。冷たい色だが酷薄な感じはしない――。「素晴らしい演奏だった、楽師殿。貴殿のことは都で評判になっている」
「ありがとうございます。６日前からいらっしゃっていましたね」
楽師の言葉にシャルナグは驚いた。いくら自分が大男とはいえ、あの群集の中で見分けられていたとは。それともこの楽師は聴衆１人ひとりの顔を記憶しているのだろうか。
「私に何か？」
「うむ。私はシャルナグという。このオドナスで王軍を預かる将軍職に就いている。決して出自の怪しい者ではない。無礼を承知で申し上げるが、ぜひ貴殿を我が屋敷にお招きしたい」
大国の将軍が一介の辻音楽師に対してあまりにも丁寧な物言いであった。現王の軍事における片腕として領土拡大に最も貢献した武人でありながら、たいへんに生真面目な性格の持ち主である。何かしら自分よりも優れた才を持つ相手に対しては、身分に関係なく敬意を表した。
「ご同行頂けるだろうか？」

「喜んで――」
楽師は目深に被ったフードと顔の薄布を取った。
「サリエルと申します。私のような者が将軍閣下にお目通り叶うなど、光栄の至りです」
「お…」
シャルナグは思わず声を出した。戦場でも滅多に見ることのできない将軍の動揺である。
そこに光が生まれたかと思うほど、楽師は美しい容貌をしていた。銀細工の両眼に透き通る滑らかな肌、遠く西方の彫像を思わせる端整な顔立ち、それを縁取る豊かな黒髪。
「これはまた…ますます人間離れだわ」
将軍に付き添っていたキルケが小さく呟いた。感嘆というより呆れたふうな口調だ。
彼の美貌に気づいた広場の群集がざわつき始めた。シャルナグは我に帰り、騒ぎになる前にと楽師を通りへと連れ出した。

オドナス王国はこの砂漠全域を統一した初の王国だった。
もともとはオアシス都市国家の一つに過ぎなかったのが、今の王に代が変わって２０年、あっという間に領土を広げ、東西の交易でもたらされる莫大な富を掌中にした。
その急速な繁栄の要因は、強力な軍事力もさることながら、現王の卓越した政治手腕にあった。
オドナスに逆らう国々への侵攻は苛烈を極めたが、統治を受け入れた者たちへの待遇は実に寛大だった。都から知事を派遣しつつも基本的に自治を認め、自由な商業と文化や宗教を守ることを約束した。その一方で、隊商を狙う盗賊団の討伐にも力を注ぎ、いくつもの盗人の首が都に晒された。砂漠に点在しながら細い交易の糸で繋がっていた国や部族を、オドナスがまとめあげて太く強靭な道を敷いたのだ。何も生み出さない砂漠の地は、今や多くの人と物と金が行きかう海となっていた。

オドナス王はまた、統治する部族の若者たちを、客人として王都に招いた。そして自分の目の届く所で教育を受けさせた。もちろんこれには統治する諸国からの人質という意味もあるが、柔軟な若者の心にオドナスの優れた文化を植えつけ、将来的に彼らの祖国にそれを持ち帰らせるという意図があった。今のところ国内に多様性を認めてはいるものの、いずれは文化的にもひとつにまとめあげてより強固な国家を目指すというのが、王の長期的な戦略である。

併合された部族にとっては為政者の都合で押しつけられた平和とも言えよう。ともあれ砂漠は一人の強力な王の元で繁栄を享受しつつあった。

都市国家であった頃は街そのものがオドナス王国の本体だったので、領土が広がった今日でも王都に特定の呼称はない。

しかしその命の源であるオアシスは、『アルハ神の恩寵』を意味するアルサイ湖と呼ばれていた。

砂漠で最大の面積と水量を誇るこの湖は、神話が示す通り、河川もなく雨も降らない灼熱の砂の中に突如として現れる。一説によると、遥か北方にそびえる山脈の雪解け水が伏流となり、この地に運ばれ湧き出しているとも言われているが、正確なところは分かっていなかった。だが５０万人余りの王都の人口に十分な水を供給し、それでもなお青い水を満々と湛えて減ることはなかった。

アルサイ湖の周囲にはここが乾いた大地であることを忘れさせるほど濃い緑が生い茂り、畑や果樹園で作物が栽培された。もちろん漁業も盛んで、上がった淡水魚や貝類は毎朝街の市場に並んだ。

王都の市街地はオアシスの南の縁に広がっていた。高度な技術をもって張り巡らされた水路は血管のようで、街中に澄んだ水を供給した。そのおかげで砂漠の中にあって都は適度な気温と湿度を保ち、豊かな緑が涼しい木陰を旅人たちに提供していた。

時に砂中のエメラルドと称されるに相応しい、美しく豊かな都である。

街は水路に沿って格子状に整備されていた。中央に市場の立つ広場があり、そこからいちばん広い通りが東西南北に伸びる。道沿いには多くの商業施設や旅人相手の宿屋が立ち並び、この国の繁栄を見せつけていた。大通りから奥へ入ると、都人たちの居住区があった。白い土壁でできた低い家々がひしめき合う。路地では子供が遊びまわり、それを叱りつけて女たちは井戸端で炊事をし、物売りが賑やかな声を張り上げた。雑然とした、しかし平和な生活が垣間見える。

広場から南北に伸びる通りを北へ進むと、やがて白い壁に囲まれた巨大な建物が現れる。その後ろはすぐアルサイ湖だ。

青い湖面を背にして、街へ水を送り出す水門を守るように建つその建物こそ、このオドナスの王宮であった。

サリエルと名乗った楽師が連れて来られたのは、格子状の街のかなり北部、王宮にも程近い場所だった。

この区域は一般の居住区と違い、広い敷地に建つ大きな屋敷が多かった。人通りも少なく、閑静な印象を受ける。

シャルナグは、その中でもひときわ立派な門を持つ屋敷にサリエルを案内した。門の両脇には使用人というにはあまりに屈強な佇まいの男が剣を携えて立っていたが、将軍を見ると背筋を伸ばして深く頭を下げた。オドナス軍から選び抜かれた精鋭なのかもしれない。

背の低い潅木が手入れされた塀の内側は広々として、葉の大きな木々が爽やかに茂っていた。庭にも水を引いているのか、せせらぎの音がする。足元には滑らかな黒い石をつないで歩道をしつらえてあった。奥に立つ屋敷は白い壁に鮮やかな彩色がしてある。壁や屋根に凝った意匠を施せるのは裕福な証拠だった。

玄関前で数名の使用人が主人を待ち構えていた。玄関といっても、砂漠の気候柄、扉のようなものはない。麻で織り上げた布が垂れ下がっている。昼間は両脇で束ねられ、風通しをよくしていた。

シャルナグは使用人たちに来客を告げ、サリエルとキルケを先に

案内させた。
彼らは客間のような広い部屋に通された。調度品はあまりないが、柔らかな絨毯の上に低い長椅子と黒檀のテーブルがある。テーブルには円い香炉があって、薄い香りがたゆたっていた。玄関と同じく部屋の仕切りは様々な色合いの布で、庭から吹き込む湿度を含んだ微風が心地よかった。
長椅子に少し離れて座ると、キルケは微笑を浮かべてサリエルを眺めた。切れ長の目ときりりとした眉が印象的な、どこか中性的な美しさを持つ女であった。歳はサリエルと同じ２０代半ばか、少し上に見える。
ここまで来る道すがら、シャルナグはサリエルに彼女を紹介していた。王宮付の歌手でその容貌から『オドナスの黒い歌姫』と称される当代きっての実力の持ち主であるという。
「…あなたが顔を隠していた理由が分かるわ」
歌姫の地声はどちらかといえば低音だった。低く囁くような、耳に心地よい声。
サリエルは肯いて手にした楽器を撫でた。
「余計な面倒ごとに巻き込まれるのは避けたいので」
「まあそうでしょうね。演奏にお金を払う前に、あなた自身を買おうとする者達が殺し合いを始めるかも」
物騒な台詞を吐きながらも、彼女の口調はどこか楽しげだった。
程なく――紺色の麻布を潜って、この屋敷の主が姿を現した。
「お待たせしたな」
部屋着に着替えたシャルナグ将軍は、立ち上がろうとした楽師を止めて、自分も彼らの向かいに腰を下ろした。
２人の侍女が入ってきて、手早くテーブルに瓶と杯を並べた。この地方でよく飲まれる山羊乳で作った酒だ。客のもてなしの定番である。
酒瓶を持つ侍女たちの手が震えていることに気づいて、シャルナグは彼女らの手から瓶を取った。このままではテーブルに酒をぶち

まけられる羽目になると考えたからだ。それでも客人に見とれていることを咎めはせず、シャルナグは彼女らを下がらせた。
「何と言うかまあ…これほど綺麗な男がこの世にいようとは」
シャルナグは正直すぎる感想を口にして溜息をついた。
サリエルは臆するでもなく少し笑った。白い歯並びが薄い色の唇から覗いて、シャルナグは無意識に目を逸らした。
将軍が手ずから2つの杯に酒をつぐと、サリエルはそれを恭しく手に取って、彼らは乾杯した。歌手であるキルケは喉のために酒類は口にしないらしい。
爽やかな酸味のある酒を飲み干してから、シャルナグは訊いた。
「貴殿は見たところ西方のご出身らしいが、オドナスにはいつ来られた？」
「都に参ったのはは10日前です。その前は、ここより遥か北方、雪山と氷海の国を旅しておりました」
「北方…天気のよい日に見える山脈の辺りか？」
「さらに北でございます。人の住む陸地の果て、そこより先には海に浮かぶ巨大な氷しかありません」
「貴殿も彼の地の生まれなのか？」
「いえ…私に故郷と呼べる土地はございません。故あって、物心ついた時からこうしてさすらっております」
その故というのを尋ねたかったが、楽師は答えない気がした。旅人たちには様々な目的と理由があり、深くは問わないのが交易都市の掟だった。
「その楽器は何という？　ウードに似ているが弓で弾くのは始めて見る」
「前の持ち主はヴィオルと呼んでいました。西国の楽器職人の手によるものです」
シャルナグは再び溜息をついて、背もたれに体を預けた。
私の半生はこの砂漠の端から端までを駆け回っていたが、この美しい男はさらに外側の世界を見知っているのだな――。

「…サリエル殿、貴殿の腕と旅の経験を見込んでお願いがある」
「どのようなことでしょうか？」
「うむ、今日、キルケ殿の賛同が得られて腹が決まった。貴殿を王宮にお連れしようと思う。王の御前でその素晴らしい楽の音を献じては頂けないか」
　サリエルはすぐに答えなった。美しい表情からは感情が読み取りにくいが、シャルナグはその沈黙を戸惑いと取った。
「王は私などとは違い芸術に明るい方だ。きっとヴィオル…だったか？　その音がお気に召すことと思う。そうなれば貴殿は宮廷楽師として召し抱えられるだろう」
「それは誠に光栄ですが…よいのですか、私のごとき素性も定かでない旅の者など」
　サリエルは少し声を低くした。
「王に仇なす敵国の刺客やもしれぬというのに」
　聞いていたキルケが、少々わざとらしく「まあ」と声を上げたが、シャルナグは明るく笑い飛ばした。
「それが狙いなら、最初からその美貌を晒すだろう。楽器など奏でずとも自然と王宮かそれに近い所から声がかかっただろうに」
　それにこの男は異質だ――そう将軍の勘が告げていた。焼けた砂を渡って来たにも関わらず、この清澄さと恐れのなさ。明らかに外の世界から来た異物だ。我々の国とまったく関係のない遥か彼方から。
　だからこそ、王の近くへ置いても安全だと思えた。
「オドナスは現王セファイド陛下の御世になって２０年、急速に領土を拡大してきた国だ。今ようやく国内が落ち着き、外交と内政の整備に力を注いでいるところだ」
　サリエルは肯いた。
「僭越ながら、この都はとてもよくできた街です。いろいろな国の都を見て参りましたが、ここほど平和で活気に満ちた場所は他に知りません。それに広場で演奏をしていて、ただの一度もたちの悪い

連中に絡まれたりしなかった。治安の良さには目を見張ります」
「オドナスの民はアルハ神に恥じない生き方をするよう幼い頃から教育されるからな」
　将軍の言葉はどことなく誇らしげだった。
「だがまだまだ我が国は人の層が薄い――あらゆる方面においてだ。内外から優秀な人材を集めねばならんのだ」
「楽師など、他にいくらでもおりましょうに」
「演奏が素晴らしい上に、砂漠の外を巡り歩いた楽師はそうはいない。陛下は外世界の様子を聞きたがっておいでだ。きっと貴殿を厚遇なさると思う」
　サリエルは長い睫毛を伏せてしばし考え、キルケはその横顔を窺った。謙遜はするが自分を卑下している素振りはなく、醸し出す雰囲気も優雅な青年だ。ふと、気になった。
「あなたのその容貌、物腰…もしかして、どちらかの国で身分のあるお方なのでは？」
「それは違います。私は身分や権力には最も遠い立場の者」
　彼は即答した。口元に苦笑に似たものが浮かんでいる。
「――かしこまりました。オドナス王に楽の音を献じます」
　シャルナグはほっと胸を撫で下ろした。

国王と王女

オドナスの第3王女リリンスは、その日、朝からとても機嫌がよかった。

毎日朝食後に出されるコダヌ――木の根を煎じた苦い飲み物で美容と健康にいいらしい――を今日は文句を言わずに全部飲んだし、苦手な礼儀作法の授業も、厳しい教師に腹を立てることなく今日は一生懸命に励んだ。

昼近くになって授業が終わり、教師がリリンスの部屋を退出すると、彼女は大きく伸びをしながらあくびをした。今出て行った教師が見たらさぞかし落胆するだろう。

「姫様、そんな大きなお口を開けて…蝿が飛び込みますよ」

侍女のキーエが呆れたように言う。

「口開けないとあくびできないでしょ。ね、あれ出しといてね、こないだ新しく作ったお衣装。夜に着るんだから」

14歳の王女は涙の溜まった黒い瞳をキラキラと輝かせながらにっこりした。

「はいはい、あの茜色のお衣装ですね。昨日からもう何度も仰せつかっていますよ」

「そうだった？　だって今夜は兄様が6ヶ月と26日ぶりにお戻りになるんだもの。綺麗にしとかなくちゃ」

「本当に姫様はアノルト様が大好きですのね。今日のように姫様のご機嫌がよいとキーエも助かります」

「私はいつもと同じよ」

リリンスは明らかに弾んだ声で答えて、椅子から飛び降りた。鏡台の前までぱたぱたと走って行って、くせのないまっすぐな黒髪を櫛で梳いた。

「お腹空いたなあ。今日のお昼は何かしら」

黙って立っていれば、どこから見ても可憐そのものの少女である。

大きな円い目が印象的な顔立ちは幼いながらに美しく、あと数年のうちに大輪の花を咲かせるであろう蕾のような清純さを漂わせていた。
だがそれは黙っていればの話であって、
「最近便秘気味なのよ。ほら、ニキビ！　毎日コダヌ飲んでるのに何でかしらねー」
およそ王女らしくない物言いに、キーエが頭痛を抑えるように額に手をやった。
「…午後からは農場にお出かけなんでしょう？　おぐしを結いましょうか？」
「ベール被ってくからこのままでいいわ。農務大臣と一緒に、アルサイ湖の北の方の農場を視察するのよ。舟に乗ってくの」
前々から農場が見たいと熱望していた好奇心旺盛なリリンスに対し、ようやく父王の許可が出たのだった。大臣が同行するとはいえ、王女が農業の現場に足を運ぶなどこれまでなかったことである。
リリンスはもう一度鏡を覗き込んでから、鏡台の隣に吊るした鳥籠に目をやった。中には鮮やかな赤い色をしたインコが一羽、止まり木に留まっている。リリンスに気づくと餌をねだるようにさえずった。
彼女は陶器の餌箱から小麦の粒を掌に出して、ぱらぱらと籠の中に入れてやりながら、
「大臣はね、もっと農場を拡げて作物を輸出に回すべきだと言うの。私はそれってどうかと思うんだけど…都の人たちが食べるには十分な料が収穫できてるわけだし、これ以上作地面積を拡げるのはアルサイの水の無駄遣いじゃない？」
「難しいことは分かりませんけれども…きっとお父様が正しいご判断をなさいますわ」
「私もちゃんと見ときたいの。それがただでごはん食べてる者の責任だと思う」
リリンスが意外なほどきっぱりした口調でそう言い切った時、部

屋の入口に吊るした目隠しの麻布を跳ね上げるようにして、別の侍女が駆け込んできた。
「ひ、姫様！」
「何ですバタバタと」
「どうしたの！？」
後輩の落ち着きのなさに眉を顰めるキーエをよそに、リリンスは露骨に顔を輝かせた。騒ぎや事件が大好きなたちなのだ。
侍女は胸を押さえて呼吸を整えながら、
「シャルナグ将軍が国王陛下への謁見におみえなのですが…推薦する楽師様をお連れになってて…それがすごく素敵な方なんです！もう目の覚めるような美男子で！」
「うっそ…」
「今、回廊においでです」
「でかした！　見に行くわよ」
リリンスは衣装の裾を持ち上げて、侍女よりも先に部屋を飛び出していった。

その日王宮は、見慣れぬ旅の楽師を迎え入れて、静かで異様な興奮に包まれていた。
王都の最北端、オアシスを背にして建つオドナスの宮殿は、白い壁に深い青の彩色を施した美しい建物だった。規模は将軍の屋敷の２０倍はある。建物は数多くの棟に分かれ、将軍宅と同じ高価な黒い石で作られた回廊がそれぞれを繋いでいる。建物の入口と部屋の仕切りはやはり薄布だが、光沢のある絹に細かい刺繍の施された豪華なものだった。
オアシスの潤沢な水で広い庭園には植物が溢れ、あちこちから鳥のさえずりが聞こえてくる。燦々と降り注ぐ陽光に露を含んだ緑がきらめき、甘い花の香りが漂う回廊を、その異国の楽師は静かに進んでいった。
先導するのはシャルナグ将軍である。今日は総髪を結い上げて、

絹の正装に身を包んでいるが、腰に巻きつけた太い皮帯には長剣が携えられていた。王宮で帯刀が許される数少ない人物だ。
若い楽師は白地に銀糸をあしらった衣装を身に着けていた。将軍宅の熟練の女中頭が選びに選んで誂えた布地だ。右手には無花果に似た形の弦楽器を抱えていた。
その楽師の美貌を聞きつけて、回廊が繋ぐ建物のそこかしこから宮廷人が顔を出した。貴族や役人、王の愛妾もいる。彼らは楽師の姿を目にすると、例外なく感嘆の溜息を漏らし、それから会釈もせずに慌てて顔を引っ込めた。
シャルナグはそんな人々に威嚇するような視線を投げつつ、
「悪く思わんでくれ。いつもはこれほど不躾でも腑抜けでもないのだ」
と、注目の的の麗人に詫びた。
サリエルは無言だが気にしている様子はない。慣れているのだろう。自覚があるのかないのか、とにかく神経は太い男だ、と、この2日間同じ屋根の下で生活してきたシャルナグは思った。
将軍の屋敷に招待されてから2日の後に王に謁見が叶うことになり、今日ここにやって来たわけだ。
回廊のいちばん先にひときわ巨大な建物があり、そこがオドナス王の居住部分だった。宮殿の中で唯一、砂漠の統一後に改築された建物である。同じく紺色に彩色された壁には波の模様のレリーフが施されている。遠く西方から呼び寄せた職人が腕を振るった。
その精緻な模様から、この建物は『風紋殿』と呼ばれていた。
入口を入ってすぐが謁見室だった。
王の謁見時間は午前中と決まっていて、楽師が本日の最後だった。すでに前の者は反対側の出口から部屋を後にしている。
「シャルナグ将軍閣下、お待たせいたしまし…た…」
呼び出し係の若い役人は、シャルナグの傍らの楽師を見て固まってしまった。
将軍はそんな反応を気にも留めず、立ち尽くす役人の傍らを通っ

て中に入ろうとしたが、我に帰った役人が慌てて止めた。
「し、失礼を。陛下は中庭でお待ちです」
「中庭で？」
「はい、将軍ご推薦の楽師の腕前を、他の皆にも聴かせたいとおっしゃいまして。正妃様はじめ大勢がお集まりです」
シャルナグは分厚い唇を歪めた。優れた楽師であれば本当に厚遇するだろうが、そうでなければ満座で恥を掻かせて追い出すつもりなのだ。
いつもながら子供っぽい真似をなさる――王をよく知るシャルナグは少し呆れた。サリエルが動じていないのが頼もしかった。

謁見室には入らずに役人の先導で来た道を引き返してゆく楽師と、一瞬目が合ったような気がして、リリンスは慌てて柱の陰に顔を引っ込めた。
庭の東屋にはリリンスをはじめ数人の侍女たちが群れていた。
「今こちらをご覧になったわ！　ね姫様、素敵な方でしょう？」
「いろんな方が謁見にいらっしゃいますけど、あんなに綺麗な殿方は初めてですわ」
侍女たちが声を潜めて、けれど興奮を抑えきれないように口々に言う。
リリンスも頬を紅潮させて、
「ほんと、これは当たりね。もう楽器の腕とかどうでもいい。立ってるだけで十分！」
「大丈夫、腕も確かですよ。きっと姫様のお気に召します」
彼女らの後ろからひょいと顔を出したのは、キルケである。
「キルケ！　来てたのね」
「ごきげんよう姫様。さっそく彼に目をつけられましたね。さすがに趣味がよろしいわ」
歌姫は口元に手を当ててくっくっと笑った。
オドナスきっての歌手であるキルケは王宮への出入りも多く、リ

リンスとも顔なじみだった。さっぱりした性格のキルケを、リリンスはまるで姉のように慕っている。
「あの人のこと知ってるの？」
「はい、シャルナグ将軍とともに彼を推挙したのはこの私ですもの」
「ど、どこで見つけてきたのよ？」
「街の広場で。辻音楽師をしていましたから」
凄まじく目立っただろうなあと想像するリリンスの背を、キルケは軽く叩いた。
「さ、私たちも中庭へ参りましょう。陛下から召集がかかっております。キーエが姫様を探し回っていましたよ」

黒い石の回廊に囲まれた中庭には、数十人もの宮廷人が集まっていた。
先ほど謁見室へ向かうサリエルを見物していた顔も見えるが、全員が好奇と期待の眼差しを向けている。
それぞれ役職をもった貴族や高官なのだろう。ほとんどが砂漠の民だったが、中には異国人と思われる髪や肌の色をした者もいた。身なりからして前の方にいるのがより身分の高い貴族、後方に下級官吏や兵士、女官たちといった具合だった。
そして、正面の建物から張り出した広縁に、オドナス王その人がいた。
大きめの肘掛け椅子に悠然と腰掛ける男――上質な濃紺の絹で作られた衣装が簡素なのは、彼がこの宮殿の主だからだ。その証拠に、椅子の後ろに並ぶ役人は例外なく正装している。歳は将軍より少し下、３０代後半だろう。浅黒い肌に短い黒髪、彫りの深い顔立ち。目も鼻も口も大きく伸びやかで、理知的で明るい印象だった。
将軍が獅子なら、王は鷲を思わせる風貌だ。
広縁の奥には、鮮やかな色合いの衣装に身を包んだ女たちが１０名余り、それぞれ長椅子や敷物の上に腰を下ろして中庭を見下ろしている。そこだけ花が咲いたように艶やかだ。王妃と、王の愛妾た

ちである。
後方にはリリンスの姿もある。今駆け込んできたところらしく、少し息を弾ませているようだった。
「国王陛下にはご機嫌麗しく」
シャルナグが跪いて挨拶すると、王は手にした長い煙管を面倒臭そうに振った。
「何を今更堅苦しい。昨夜も一緒に飲んだだろうが」
よく通る快活な声だった。この声で指揮される兵士は、高揚と安堵の中で戦えるだろう。
「外の騒ぎがここまで聞こえておったぞ、シャルナグ。貴様、何者を連れて来た？」
「陛下、事前の報告では北方から参った楽師で…」
背後の役人の説明を遮って、国王は将軍の隣に控える楽師に直接声をかけた。
「頭を上げて顔を見せろ」
サリエルは無言で顔を上げた。
国王は初めて正面から彼を見た。サリエルもまた、目を逸らさず大国の支配者を見据えた。
黒と銀の眼差しがしばらくの間交錯した。
隣にいるシャルナグが焦るほど長く沈黙が続いた後、国王は唇の端を吊り上げて笑った。
「なるほど、皆が騒ぐほどのことはある。人間の男とは思えぬほどだ」
確かに、彼が見たどの国のどの人間よりも彼は美しかった。だが王は他の者のようにその美貌に見とれることはなく、むしろ挑戦的に見下ろした。
「余がオドナス王セファイドである」
「サリエルと申します、陛下。お目にかかれて光栄に存じます」
サリエルは深々と頭を下げた。こちらにも萎縮した様子は少しもない。

セファイドは背凭れに体を沈めて足を組むと、煙管に口をつけた。息とともに紫色の煙が吐き出される。
「だが見てくれと楽師の才とは関係ないな。まず、その楽器を奏でてみよ。そなたと話をするかどうかはそれから決める」
「御意にございます」
サリエルは戸惑うこともなく地面に座りなおして、ヴィオルを膝に抱えた。短い弓を構え、弦の上を滑らせた。
ふくよかで艶のある音色が中庭に響き渡った。シャルナグを除いて、そこにいる誰もが初めて聞く音色だ。
演奏されたのは、その音色によく合った切なく甘い旋律の曲だった。サリエルの象牙のような指が、ある時は目で追えぬほど早く、ある時は一本の弦を長く震わせて、指盤の上を動いた。音を聞かずとも、その動きを見ているだけで幻惑される者もいるのではないか。
これは恋歌なのかもしれない――シャルナグはそう思った。誰かたまらなく愛しい者の名前を、旋律に乗せて何度も何度も呼んでいるように聞こえる。ヴィオルの音域はとても人の声に近い。
シャルナグは数年前に亡くした妻を思い出していた。彼の遠征中に急病で命を落とした最愛の女。勝利を収めて帰宅した時には、もう荼毘に伏された後だった。それから彼はずっと独り身を通している。
甦ってきたのは喪失の悲しみではなく、妻と過ごした日々の幸福感であった。
やはり凄い、この楽師の演奏は尋常ではない――数年ぶりに溢れそうになる涙を、シャルナグは必死に押し殺した。
サリエルがこの都で披露した中で最も長い曲だった。やがて切なげな和音を響かせてそれが終わった時、大臣も役人も兵士も女官も、皆その演奏に魅了されていた。
「…ご無礼を」
サリエルは楽器を置き、再び跪いて頭を下げた。疲労の色は見えない。

セファイドは大きく息を吐いて瞼を開けた。我知らず目を閉じていたらしい。この王の脳裏にはいったいどんな想いが去来したものか――。

「見事だった」

彼は穏やかに告げた。薄い笑みが浮かんでいる。オアシスからの涼しく湿った風を感じた時の表情に似ている。

侍従の一人が差し出した煙草盆に煙管の灰を落としながら、

「初めて聴く音色だが、何とも言えず心地よい。別の世界の歌を聴いているようだった」

「勿体ないお言葉でございます、陛下」

「…よかろう、そなたを宮廷楽師として召し上げる」

背後に控えた役人たちもその言葉に異存はないようだった。ほんの1曲耳にしただけなのに、音楽に縁のない者にさえこの楽師の実力は分かった。

セファイドはシャルナグに目をやった。

「この男を俺の傍に仕えさせるが、よいな？」

「陛下の御心のままに」

「おまえの推挙だ、出自については心配いらんだろう。まったく、おまえのような無骨者にこんな拾い物ができるとはな」

自分でもそう思っていたシャルナグは苦笑して、セファイドも声を上げて笑った。

それから彼は集まった人々に解散を命じた。今日聴けた楽師の演奏は素晴らしく、王の余興のために仕事を中断させられた者たちにとっても十分その甲斐があったらしい。迷惑げな表情で持ち場に戻る者は1人もいなかった。

徐々に中庭が静かになってゆく中、セファイドはサリエルに近くへ来るよう言った。彼を広縁に上げると、椅子の数歩先に控えさせて、肘掛けについた右手に顎を乗せながら、いくつか質問をする。

その楽器の名は？　オドナスへはいつ来た？　ずっと砂漠を旅しているのか？

サリエルは将軍宅で答えたのと同じように返答をした。ただ自分の出身についてだけはやはり同じくぼかして答えたが、王もそこは深く追求しなかった。彼の肌の色も目の色も、砂漠から遠く離れた国の民であると証明している。

セファイドは質問をしながら、サリエルの顔を凝視した。色素の薄い端整な顔立ち――冷淡ではないが、その表情からは感情が読み取りづらい。すべてを拒絶しているようでもあり受容しているようでもある。だが――。

「…以前にどこかで会っただろうか？」

記憶を手繰るように目を細めて、セファイドはそう訊いた。胸の奥に、さざ波が消えない。湖の奥深くに投げ込まれ、水面に波を立てているものの本体が何か分からなかった。

当然のごとく、サリエルは首を振った。

「いいえ」

「まあそうだろうな…俺の勘違いだ」

シャルナグはそんな国王の様子を眺めて、少し意外な気がした。彼の知る限り、セファイドは初対面でその者が自分の敵か味方か、有能か無能か、直感的に見抜くことが多かった。その彼が、ここまで興味深げに他人を眺めている。戸惑っている、とも取れる。獲物の正体を計りかねて上空を旋回する猛禽類のようだ。

奇妙な空気を掻き消すように、セファイドは軽く首を振って煙管の煙をふかした。

「宮廷楽師になったからといっておまえの自由は何ら制限されるものではない。誰の前で弾いてもよいし、街へ出ることももちろん構わない。だが、ひとつだけ」

彼は本気か冗談か分からない笑みを浮かべて、

「王宮内での色事は自重してくれ。十分自覚があると思うが、おまえの取り合いで国が滅んではかなわんからな」

「かしこまりました」

サリエルは特に謙遜することもなく、生真面目な表情で肯いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5667z/

砂と水と月の国で

2011年12月25日23時50分発行